

## 南總里見八犬傳

【外題】

里見八犬傳 肇輯 卷一

【見返】

曲亭主人藁本、南總里見八犬士傳、柳川重信像、山青堂

【序】書き下し

八犬士傳序「噪野風秋」

初め里見氏の安房に興るや、徳誼以て衆を率ゐ、英略以て堅を摧く。二總を平吞して、之れを十世に傳へ、八州を威服して、良めて百將の冠たり。是の時に當て、勇臣八人有り。各大を以て姓と爲す。因て之を八犬士と稱す。其れ賢虞舜の八元に如すと雖ども、忠魂義膽、宜しく楠家の八臣と年を同して談すべきなり。惜い哉筆に載する者當時に希し。唯だ坊間の軍記及び榎氏が『字考』、僅かに其姓名を識るに足る。今に至て其の顛末を見る由し無し。予嘗て之を憾む。敢て残珪を攻めんと欲す。是より常に舊記を攷獵して已まず。然ども猶考据有ること無し。一日低迷して寝を思ふ。嘗聴の際だ、客南總より來る有り。語次八犬士の事實に及ぶ。其の說軍記傳所の者と同からず。之を敲けば則ち曰く、「曾て里老の口碑に出たり。敢て請ふ主人之を識せ」予が曰「諾、吾れ將に異聞を廣ん」と。客喜て而して退く。予之を柴門の下りに送る。臥狗有り。門傍に在り。予忙として其の尾を踏めば、苦聲倏ち足下に發る。愕然として覺め來れば、則ち南柯の一夢なり。頭を回して四下を覽れば。茅茨客無く。柴門に狗吠無し。言<sup>コト</sup>熟く客談を思へば、夢寐と雖ども捨つべからず。且に之を録せんとす。既にして忘失半ばに過ぐ。之を何奈すること莫し。竊かに唐山の故事を取りて。撮合して以て之を綴る。源禮部が龍を辨するが如きは。王丹麓が『龍經』に根つく。靈鷲書を瀧城に傳るが如きは。張九齡の飛奴に擬す。伏姫八房に嫁するが如きは。高辛氏其の女を以て槃瓠に妻すに倣へり。其他毛擧に違あらず。數月にして五卷を草す。僅に其の濫觴を述て。未だ八士の列傳を創せず。然と雖ども書肆豪奪して諸を梨棗に登す。刻成て又其の書名を乞ふ。予漫然として敢て辭せず。即ち『八犬士傳』を以て之に命す。

文化十一年甲戌秋九月十九日。筆を著作堂下の紫鷺池に洗ぐ。

養笠陳人解撰

「曲亭馬琴著作堂之印」「乾坤一草亭」

【序】原文

八犬士傳序「噪野風秋」

初里見氏之興於安房也。德誼以率衆。英略以推堅。平吞一總。傳之于十世。威服八州。良為百將冠。當是時。有勇臣八人。各以犬為姓。因稱之八犬士。雖其賢不如虞舜八元。忠魂義膽。宜與楠家八臣同年談也。惜哉載筆者希於當時。唯坊間軍記及槇氏字考。僅足識其姓名。至今無由見其顛末。予嘗憾之。敢欲攻殘珪。自是常敗獮舊記不已。然猶無有考據。一日低迷思寢。警聽之際。有客自南總來。語次及八犬士事實。其說與軍記所傳者不同。敲之則曰。曾出于里老口碑。敢請主人識之。予曰諾。吾將廣異聞。客喜而退。予送之于柴門下。有臥狗。在門傍。予忙乎踏其尾。苦聲條發于足下。愕然覺來。則南柯一夢也。回頭覽四下。茅茨無客。柴門無狗吠。言熟々思客談。雖夢寐不可捨。且錄之。既而忘失過半。莫奈之何。竊取唐山故事。撮合以綴之。如源禮部辨龍。根于王丹麓龍經。如靈鷲傳書於瀧城。擬張九齡飛奴。如伏姬嫁八房。倣高辛氏以其女妻槃瓠。其他不遑毛舉。數月而草五卷。僅述其濫觴。未創八士列傳。雖然書肆豪奪登諸梨棗。刻成又乞其書名。予漫然不敢辭。即以八犬士傳命之。

養笠陳人解撰

文化十一年甲戌秋九月十九日。洗筆於著作堂下紫鴛池。

「曲亭馬琴著作堂之印」「乾坤一草亭」

【再識】

世にいふ里見の八犬士は、いぬやまどうじ犬山道節いぬつかしの犬塚信乃いぬさかのかみ犬坂上毛いぬかみ犬飼見八いぬかひ犬川莊佐、  
大江親兵衛いぬえしんべ真平まへら、犬村大角いぬむらたかく角太郎かくたろう、犬田汶吾いぬたぶんご小文吾こぶんご、則是なり。その名軍記に粗見えて、本貫終始を審にせず。いと惜むべき事ならずや。よりに唐山高辛氏の皇女、槃瓠はんこ大のに嫁したる故事に倣ふて、個小説を作設、因を推、果を説て、婦幼のねぶりを覺すものなり。筆輯五卷は、里見氏の、安房に起れるよしを演。亦是唐山演義の書、その趣に擬したれば、軍記と大同小異あり。且狂言綺語をもてし、或は俗語俚諺をまじへ、いと嗚呼しげに綴れるは、固より翫物なれば也。この書第八回、堀内蔵人貞行が、犬懸の里に雛狗を獲たる條より、第十回、義実の息女伏姫が、富山の奥に入る條まで、これ全傳の發端也。しかれども首尾具足して、全體を闕ことなし。二輯三輯に及ては、八人おのゝ列傳あり。來ん春毎に嗣出して、全本となさんこと、両三年の程になん。

養笠陳人再識

【目録】

有像南總里見八大傳筆輯總目錄

第一回

季基訓を遣して節に死す 白龍雲を挾んで南に歸く

第二回

一箭を飛して使者白馬を誤つ 兩郡を奪ふて賊臣朱門に倚る

第三回

景連信時暗に義實を阻む 氏元貞行厄に館山に従ふ

第四回

小港に義實義を集む 笹の内に孝吉誓を逐ふ

第五回

良將 策を退けて衆兵仁を知る 靈鴿書を傳へて逆賊頭を贈る

第六回

倉廩を開いて義實二郡を賑す 君命を奉りて孝吉三賊を誅す

第七回

景連奸計信時を賣る 孝吉節義義実に辭す

第八回

行者の石窟に翁伏姫を相す 灌田の近邨に狸雜狗を養ふ

第九回

盟誓を破つて景連兩城を圍む 戲言を信じて八房首級を獻る

第十回

禁を犯して孝徳一婦人を喪ふ 腹を裂きて伏姫八大子を走らす

筆輯題目通計二十回 完

【口絵】

浪中龍門に上り去ことを得て 歎ぜず江河歲月の深を

里見治部大輔義實

碓子尔春忍光八難波江乃始垂母辛之河爾加久尔世波 著作堂

金碗八郎孝吉

周公恐懼流言の日

王莽謙恭士に下る時

若し當年にして身便ち死せ使めば

今に至りて真偽誰知ること有らん

白居易讀史の詩

山下柵左衛門尉定包

神餘長挾介光弘が嬖妾玉梓

何事をおもひけりともしられしな えみのうちにもかたなやはなき 衣笠内府

安西三郎太夫景連

麻呂小五郎信時

堀内藏人貞行

朴平

無垢三

枚倉木曾介氏元

深宮に飽食の猙獰を恣にし

毯に臥し氈に眠て憤れて驚かず

却て簾を捲く人に放出されて

宜男花下新晴に吠ゆ

元貢性之詩

伏姫

里見義實の愛犬八房

正夢と置行鹿や照射山 東岡舎羅文

金碗大輔孝徳

八犬子鬢歳白地藏之圖

平居待むこと勿れ汝が青年なるを

此青年に趁て好く勉めよや旃

あげまきはあとだにたゆる庭もせに おのれ結べとしげる夏草 定家卿和歌

犬山道松 犬飼玄吉 犬川莊助 犬田小文吾 犬坂毛野 犬村角太郎 犬江真平 犬塚信乃  
大和尚

【広告】

曲亭家方賣劑畧目「乾坤一草亭」

巻端半頁の餘帙あるをもて營生要緊の旨を録して恭しく四方の君子に告奉ること左の如し

家傳神女湯 一包百銅 此はこの作者が家傳の良方婦人諸病の神薬にしてわきて産前産後ちのみに即功あり。さるにより相傳五世に及て家に難産天折の婦人あることなし。用ひやうはつばらにつゝみ紙にしるしつ。ちかき比はいよゝますゝその功抜群自餘の賣劑にまされるよしにて求め給ふ君子少からず。いと歡しきことになん。

つき虫の妙薬 一包六十四銅 半包三十二銅 婦人毎月つきやくになり給ふときつきむしにいためらるゝに用ひて甚妙也。又産後におり物くだりかぬるによし。すべて月やく不順に功あり。

精製奇應丸 大包(二百粒余入)代式朱 中包(三十六りう入)代一匁五分 小包(十一粒入)代五分 (但五分より下小うり不仕候)

世にきおふ丸多しといへども製方等閑にしてやくしゆに極品をえらまざれば奇應丸の名ありといふともきおふ丸の功のつなし。こゝに製するところ薬種のあたひをいとはず分量すべて法にしたがひ製法尤つゝしめり。是をよのつねの奇應丸にくらぶればその功百倍万倍也。

諸病針灸ほごし療治 毎月七日 廿七日

是まで廿三日なりしを廿七日とす。朝四ツときより。所望の人々は入來せよ。いさゝかも謝物はうけ不申。こは孩児が宿願によりその師小坂先生出席点誌す。

右製藥弘所並に施療 江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店向 瀧澤氏精製 「曲亭」

取次所 大坂心齋橋筋唐物町南へ入 書林河内屋太介 江戸芝神明前 書肆いつみや市兵衛

招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり此印なきは偽劑に係る

【本文】

南總里見八大傳卷之一

東都 曲亭主人編次

第一回 季基訓を遣して節に死す  
白龍雲を挾みて南に帰く

京都の將軍、鎌倉の副將、武威衰へて偏執し、世は戦國となりし比、難を東海の濱に避て、土地を關き、基業を興し、子孫十世に及ぶまで、房総の國主たる、里見治部大夫義実朝臣の、事蹟をつらゝく考るに、清和の皇別、源氏の嫡流、鎮守府將軍八幡太郎、義家朝臣、十一世、里見治部少輔、源季基ぬしの嫡男也。時に鎌倉の持氏卿、自立の志、頻にして、執権憲実の諫を用ひず、忽地嫡庶の義をわすれて、室町將軍義教公と、確執に及びしかば、京軍猛によせ來りて、憲実に力を戮し、且戦ひ且進で、持氏父子を、鎌倉なる、報國寺に押籠つゝ、詰腹を切せけり。是はこれ、後花園天皇の永享十一年、二月十日のことになん。かくて持氏の嫡男義成は、父ととも自害して、屍を鎌倉に留むといへども、二男春王、三男安王とまうせし公達は、辛く敵軍の囲を脱れて、下総へ落給ふを、結城氏朝迎とりて、主君と仰ぎ奉り、京都の武命に從はず、管領清方の持朝の大軍をも、肩とせず。されば義に仗て死をだも辞せざる、里見季基を首として、凡持氏恩顧の武士、招ざれどもはせ集りて、結城の城を守りしかば、大軍に囲れながら、一たびも不覺を取らず。永享十一年の春の比より、嘉吉元年の四月まで、籠城三年に及ぶものから、外に援の兵なければ、糧も矢種も竭果つ。「今ははや脱るゝ途なし。只もろともに死ねや」とて、結城の一族、里見の主従、城戸推ひらきて血戦し、込入る敵をうち靡けて、衆皆討死する程に、その城竟に陥りて、両公達は生拘られ、美濃の垂井にて害せらる。俗にいふ結城合戦とはこれ也。

かゝりし程に、季基の嫡男、里見治部大夫義実ぬし、このときは又太郎御曹司と呼ばつゝ、年なほ井に満ざれ共、武勇智略は父祖にもまして、その才文道にも長たり。三年以來父と共に、籠城の艱苦を厭はず、この日も諸軍に先たちて、敵十四五騎斬て落し、なほよき敵と引組て、討死せんとして進みしを、父の季基遙に見て、遽しく呼びとめ、「やをね義實、勇士は元を喪ふことを忘れず。けぶを限りと思ふこと、理りあるに似たれども、父子もる共に討死せば、先祖へ不孝これに過す。京鎌倉を敵とし受て、貳ごろを存することなく、勢竭き、力窮り、落城のけぶに至りて、父は節義の為に死し、子は又親の為に脱れて、一命をたもつとも、何かは羞る事あらん。速に殺脱て、時節を俟て家を興せ。とくゝ落よ」といそがせは、義実は聞あへず、鞍坪に頭を低、うつけ給

はり候ひぬ。しかはあれど、親の必死を外に見て、阿容々々と脱るゝことは、三才の小児も要せじ。況己前の家に生れて、某こゝに十九歳、文武の道にわけ入りて、順逆邪正、古人の得失、大概はこれをしれり。只冥土黄泉のおん供とこそ思ひ奉れ。死べき処に得死すして、笑ひを招き、名を汚し、先祖を辱しめ奉らんことは、願しからず候」と答る辞勇しき。兒つくゝとうちまもる、父は頻に嘆息し、「義実微妙申たり。さりながら、圓頂黒衣に容を更、出家沙門になれといはゞ親の教に悖りもせめ。』時節を俟て家を興せ』といふを推辞は不孝也。しらすや足利持氏ぬしは、譜代相傳の主君にあらず。抑わが祖は一族たる、新田義貞朝臣に従ひて、元弘建武に戦功あり。しかりしより新田の餘類、南朝の忠臣たれども、明德三年の冬のはじめに、南帝入洛ましゝて、憑む樹下雨漏りしより、こゝろならずも鎌倉なる、足利家の招ぎに隨ひ給ひし、亡父は里見大炊満兼主の父に出仕し、われは持氏ぬしにつかへて、今幼君の為に死す。志は致したり。これらの理義を辨へすは、只死するをのみ武士といはんや。学問も又そのかひなし。かくまでいふを用ひずは、親とな思ひそ、子にあらず」と辞せわしく敦圍給へば、義実道理に責られて、思はず馬の鬣へ、落す涙は道芝に、結ぶがことき本の露、未の霏と親と子が、後れ先たつ生死の、海よりあらし鯨波の声、こなたへ進む敵軍を、季基估と見かへりて、「時移りてはかなはじ」と思ふことさへ豫てより、こゝろ得させし譜代の老黨、枚倉木曾介氏元、堀内藏人貞行等に、注目をしてければ、兩人齊一身を起し、「俺們おん供つかまつらん。誘給へ」といひあへず、木曾介は義実の、馬の轡を牽めぐらし、藏人はその馬の、尻を拍て逐走らせ、西を投てぞ落てゆく。

むかし彼楠公が、桜井の驛より、その子正行を返したる、こゝろはおなじ忠魂義膽、斯ありけんと想像り、残り留る兵士等は、愀然として列居たり。季基は落てゆく、わが子を雲時目送りつ、「今はしも心やすし、さらば最期をいそがんとて、鞍かい繰り、馬騎かへして、十騎に足らぬ残兵を、鶴翼に備つゝ、群り來つる大軍へ、会釋もなく突て入る。勇將の下に弱卒なければ、主も家隸も二騎三騎、敵を撃ざるものはなく、願ふ所は「義実を、後やすく落さん」と思ふ外又他事なければ、目にあまる大軍を、一足も進せず、躬方の死骸を踏躰て、引組では刺ちがへ、おなじ枕に臥ほどに、大將季基はいふもさらなり、八騎の従卒一人も残らず、僉乱軍の中に撃れて、鮮血は野逕の草葉を染、體は彼此に筭を紊して、馬蹄の塵に埋といへども、その名は朽ず、華洛まで、立のほりたる丈夫の、最もはげしき最期也。

さる程に、里見冠者義実は、枚倉堀内に導れて、十町あまり落延つ。「さるにても嚴君はいかになり果給ひけん。おぼつかなし」といくそたび、馬の足掻を駐めつゝ、見かへる方は關の声、

矢叫の音響しく、はや落城とおぼしくて、猛火の光天を焦せば、吐嗟とばかり叫びあへず、そがまゝ鞆ひきしぼりて、騎かへさんとしたりしかは、兩個の老黨左右より、鑓に携て動せず。「これは物体なし。今更に、ものによ狂ひ給ふらん。大殿の教訓を、何とか聞召たるぞ。今落さるゝ城に還て、可惜おん身を喪給はゞ、古歌にも詠る夏虫の、火むしよりなほ果敢なき所為なり。』夫大信は信ならず、大孝は孝なき如し』と古人の金言日來より、口順給ふには似けなし。凡貴きも賤きも忠孝の道は一條なるに、迷ひ給ふはいかにぞや。こなたへ來ませ」と牽駒の、こゝろも狂ふ孝子の哀傷、頻りに焦燥声もはげしく、「放せ貞行。禁るな氏元。你達が諫言は、親の御こゝろなるべけれど、今これをしも忍びなば、われ人の子といはれんや。放せ〜」と鞭を揚て、打どあふれど玉匣、ふたり等き忠臣の、拳は金石、些も緩めず、鞭るゝ隨に牽てゆく。馬壇、鞍懸、柳坂、けふりは後に遠離る、火退林のほとりにて、勝誇たる鎌倉勢、二十騎あまり追躰來つ。「適武者態逸足はやし。糾威の錯着て、五枚青の鍔形の、間に輝く白銀もて、中黒の紋挫たるを、大將と見るは俯目狀。逢し返せ」と呼かけたり。義実は些も擬議せず。「あながまや雜兵はら。敵をおそれて走るにあらねば、返すに難きことあらんや」とて、馬をきりんと立なほし、大刀抜翳て進み給ふ。大將を撃せじとて、枚倉堀内推竝で、敵の矢面に立塞り、鎗を捨て突崩す。義実は亦老黨を撃せじとて馬を馳よせ、前後を争ふ主従三騎、大勢の真中へ、十文字に鬼通て、躰て巴字にとつて返し、鶴翼に連て、更に魚鱗にうち遠り、西に當り、東に靡け、北を撃ては、南に走せ、馬の足を立させず。三略の傳、八陣の法、共に知たる道なれば、目今前にあるかとすれば、忽然として後にあり、奮撃突戦秘術を竭す、千変萬化の大刀風に、さしもの大勢乱騒きて、むら〜はつと引退く。敵退けば枚倉等は、主を諫て徐々と、落るを更に跟て來る、端武者は遠箭に射て落し、追いつかへしつ林原、三里が程を送られて、終には落る夕日の迹に、十六日の月圓なり。

こゝより追來る敵なければ、主従不思議に虎口を脱れて、その夜は白屋に宿りを投め、巨立の置土産に、馬物具をあるじにとらせて、姿を變じ、笠をふかくし、東西すべて敵地なれども、聊志すかたなきにあらねば、相模路へ走りつゝ、第三日にして三浦なる、矢取の入江に着給ふ。固より裏む糧もなく、盤纏乏しき落人となりも果たる主従は、いといたう餓疲れて、松が根に尻をかけ、逢に後れし堀内蔵人貞行を俟着て、安房の州へ渡さんとて、鞍の鮒の息吹あへず、見わたす方は目も廻に、入江に続く青海原、波しづかにして白鷗眠る。比は卯月の夏霞、挽遣したる鋸山、彼かとはかり指せは、こゝにも壘もて穿なし、刀して削るがごとき、青壁峙て見るめ危き、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含る漁村の柳、夕を送る遠寺の鐘、いと哀れを催すもの

から、かくてあるべき身にあらねば、頻に津をいそげとも、舩一艘もなかりけり。

當下そのと杖倉木曾介すずき氏元しげもとは、笹屋とみやの門かどに乾魚ひきいとり納いるゝ、白水郎あまが子こどもをさし招まねぎ、「喃響ななうな鬘あま等に  
もの問とん。前面むかひへわたす舟ふねはなきや。熟ぬ浦曲なれに流浪りやうわひて、いとしく餓うへたるに、われはともあれ  
この君きみへ、物ものあらは進まらしね」と他事たじなくいへば、そが中なかに、年とし十四五しごなる悪太郎あくたろう、赤熊しやぐまに似にたる  
額ひたぬが髪かみ、潮風しほかぜに吹ふ黒くろれし、顔かほに垂たるゝを挿かき揚あす、採断ねぞきるゝとき青涕あせはなを、嚙すり籠こめつゝすゝみ出いた「癡れた  
ることをいふ人ひとかな。打うつゝく合戦あひせんに、舩ふねは過半おほかた借かりとられて、漁獵すななだにも物足ものたらぬに、誰たれかは前むかひ  
へ人をわたさん。されは又またこの浦うらに、汲ひむ塩しほよりもからぎ世よは、わが腹はらひとつ肥こしかぬるに、馴なれ  
えしらぬ人の飢うへを、救すふべき糧かたはなし。堪たがたきまで脚ひた境かは、これを食くへ」とあざみ誇ほて、塊つぶ  
を挿取かいづゝ、投なげかけんとする程ほどに、氏元しげもとはやく身をひらけば、塊つぶは衝つと飛越とびて、松まつが根ねに尻しをか  
けたる、義実よしざねの胸前むねまへへ、閃ひらき来きれば自若じじやくとして、左ひだりのかたへ身を反そらし、右みぎ手にぞこれを受給うけ給たまふ。  
現憎げんぞうむべき為ために、氏元しげもとは曇時ともしも得堪えたらず、眼まなこを睜ひら、声をふり立たた、「こは嗚呼あなる癖者くせものかな。旅たび  
ればこそ汝等なんぢらに、「一碗いっぱんの飯いひを乞こすれ。糧かたなくはなしといふとも、辞ことばに物は没いまじきに、無礼なれなる  
所行ところぎも限りあり。いでその頤あご裂ひれて、思おもひしらせん」と敦園いそつゝ、刀かたなの鞘かに手を掛かけて、走り撃うた  
としたりしかは、義実よしざね急に召禁よびいめ、「木曾き介すけ大人おとな気なし。麒麟きりんも老おいては驚馬おどに芬あり、鸞鳳らんぼうも窮きうすれ  
ば、蟻あの為ために苦くめらる。昨きのうはきのふ、今はけふ、よるべき身を忘わすれし故ゆゑ。彼等かれらは敵手あいてに足た  
もの也。つらゝものを案あするに、土つちはこれ國くにの基もと也。われ今いま安房あまへ渡わたるに及びて、天てんその國くにを給  
ふの兆きざし也。彼かれを無礼なれ也と見るときは、憎にくむに堪たたり。これを吉祥きしやうとするときは、歡よろこぶべき事ことなら  
ずや。晋しんの文公ぶんこうが五鹿ごろくの故事ことば、よく今日けふのことに似にたり。賀がすべし」とみづから祝いへて  
塊かたまりを三度さんど戴たいき、そがまゝ懐いへ挟給かへば、氏元しげもともやゝ睨にて、刀かたなの鞘かに掛かけし手てと、共ともに怒いりを解とお  
さめ、そのゆくするは憑たのじき、主君しゅきんを壽ちうぎ奉ほうれば、白水郎あまが子こどもは掌てを拍うて、いよゝあざみ  
笑わらひけり。

時に磯山いそやま、雲叢うんそう立て、海面うみ俄頃いつしんに晦くろむたり、磁石じしに塵ちりの吸するゝごとく、潮水うしほ頻しばしばりに逆上さかり、風颯かぜせと  
おとす程ほどこそあれ、雨あめは彼鞍岡かのくらがの篠しのより繁しげく降ふそゞぎ、電光でんくわまなくして、雷かみさへおどろゝゝしへ、  
落おかゝるべく鳴撲なびけば、俵わら僮たうどもは劇騒げきそうぎて、

【挿絵】「義実三浦に白龍を見る」「里見よしさね」「杉倉木曾之介氏元」「堀内蔵人貞行」

笹屋とみや々々々々に走はしり、裡うちより鎖かして、敵たいども開あけず。かくてぞ義実よしざね主従しゅじゆんは、笠かさやどりせんよしの  
なければ、入江いしやの松まつの下蔭したかげに、笠かさを翳かして立給た給たまふ。

さる程ほどに、風雨かぜあめますゝ烈はてて、或あるは晦くろく、或あるは明あく、よせては碎くだけ、碎くだけては、又また立たちかへる

浪を包て、廻翔る雲の中に、物こそあれ、と見る目靨く、忽然として白龍颯れ、光を放ち、浪をまき立、南を投てそ飛去ける。且して、雨霽、雲おさまり、日は没ながら影はなほ、海に残りて波をいろとり、梢を傳ふ松の葉、吹拂ふ風に散る玉は、沙石の中に輒没る。山は遠して、翠ふかく、巖は青して、いまだ乾かず、瞻望に倦め絶景佳境も、身の憂ときはころる止らず。氏元は義実の、衣の濕吹気を拂ひなどして、後れたる貞行を、今か〜と俟程に、義実海面を指して、「向に雨いと烈しくて、立駢きたる浪の間、叢雲頻りに廻翔り、彼岩のほとりより、白龍の升りしを、木曾介は見ざりし歎」と問れて直と足を跪、「龍とは認め候はねど、あやしき物の股かとおぼしく、輝かゞやくこと鱗のとききを、僅に見て候」といへば義実うち點頭、「さればこそその事なれ。われはその尾と足のみ見たり。全身を見ざりしこと、慄むべく惜へし。

夫龍は神物也。変化固より彊なし。古人いへることあり。龍は立夏の節を俟て、分界して雨を行。これを名けて分龍といふ。今は則その時也。夫龍の灵たるや、昭々として通く顯れ、隱々として深く潜む。龍は誠に鱗虫の長也。かゝる故に、周公易を繫ぐとき、龍を聖人に比たり。しかりといへども、龍は欲あり、聖人の無欲に及ず。こゝをもて、人或はこれを豢、或は御、あるひは屠る。今はその術傳るものなし。又佛説に『龍王經』あり。大凡雨を禱るもの、必まつこれを禱。又『法華經』の提婆品に、八歳の龍女、成佛の説あり。善巧方便也といふとも、禱て驗を得るものあり。この故に、龍を名づけて雨工といふ。亦これを雨師といふ。その形状を辨するとき、角は鹿に似て、頭は駝に似たり。眼は鬼に似て、項は蛇に似たり。腹は屋に似て、鱗は魚に似たり。その爪は鷹の似く、掌は虎の似く、その耳は牛に似たり。これを三停九似といふ。

又その含珠は頷にあり。司聽ときは角を以す。喉の下、長径尺、こゝを逆鱗と名づけたり。物あつてこれに中れば、怒らずといふことなし。故に天子の怒り給ふを、逆鱗とまうす也。雄龍の鳴ときは、上に風ふき、雌龍の鳴ときは、下に風ふく。その声竹筒を吹くごとく、その吟するときは金鉢を裏が如し。彼は敢衆行かず、又羣處ことなし。合するときは體をなし、散するときは章をなす。雲氣に乘し、陰陽に養れ、或は明に、或は幽なり。大なるときは宇宙に徜徉し、小なるときは、拳石の中にも隠る。春分には天に登り、秋分には淵に入り、夏を迎れば、雲を凌て鱗を奮ふ。これその時を樂也。冬としなれば泥に淪み、潜蟄て敢出す。これその害を避る也。龍は尤種類多し。飛龍あり、應龍あり、蛟龍あり、先龍あり、黃龍あり、青龍あり、赤龍あり、白龍あり、元龍あり、黒龍あり。

白龍物を吐ときは、地に入て金となり、紫龍涎を垂るるときは、その色透て玉の如し。紫稍花は

龍の精也。蛮貊鬻で薬に入る。鱗あるは蛟龍なり。翼あるは應龍也。角あるを龍龍といひ、又蛟龍ともこれをいふ。角なきを死龍といひ、又これを蝮龍といふ。又蒼龍は七宿也。班龍は九色なり。且百里の外を見る。これを名けて驪龍といひ、優樂自在なるものを、福龍と名けたり。自在を得ざるは薄福龍、害をなすはこれ悪龍、人を殺すは毒龍也。又苦て雨を行、是則垂龍也。又病龍のふらせし雨は、その水必腫し。いまだ、升天せざるもの、易に所謂蝮龍也。蝮龍は長四丈、その色青黒して、赤帶錦文の如し。火龍は高七尺あり。その色は真紅にして、火焰炬を聚る如し。

又癡龍あり。懶龍あり、龍の性は淫にして、交ざる所なし。牛と交れば、麒麟を生み、豕に合へば象を生み、馬と交れば龍馬を生む。又九ツの子を生む説あり。第一子を蒲牢といふ。鳴ことを好むもの也。鐘の龍頭はこれを象る。第二子を囚牛といふ。音を好むもの也。琴鼓の飾にこれを付。第三子を蚩物といふ。呑ことを好むもの也。盃蓋飲器に、これを画く。第四子を嘲風といふ。險を好むもの也。堂塔樓閣の瓦、これを象る。第五子を睺眦といふ。殺ことを好むもの也。大刀の飾にこれを付。第六子を扇廬といふ。こは又を好むとなん。いにしへの龍象、印材の扭、文章星の下に画く、飛龍の如き、みな是也。第七子を狻猊といふ。訟を好むもの也。第八子を狻猊といふ。狻猊は乃獅子也。坐することを好むもの也。倚子曲象に象ることあり。第九子を霸下といふ。重を肩を好むもの也。鼎の足、火爐の下、凡物の枕とするもの、鬼面のごときは、則これなり。これらの外に又子あり。憲章は囚を好み、饗饗は水を好み、蟋蟀は腥を好み、蝮蛇は風雨を好み、螭虎は文采を好み、金猊は烟を好み、椒圖は口を閉るを好み、蚺蛇は險に立を好み、鰲魚は火を好み、金吾は睡さるものとぞ。皆これ龍の種類なり。

大なるかな龍の徳、易にとつては乾道也。物にとつては神聖なり。その種類の多きこと、人に上智と下愚とあり、天子匹夫の如くなる故。龍は威徳をもて、百獸を伏するもの也。天子も亦威徳をもて、百宙を率給ふ。故に天子に袞龍の御衣あり。天子のおん顔を、龍顔と稱、又おん形體を龍體と唱、怒らせ給ふを逆鱗といふ。みな是龍に象る也。その徳枚挙へからず。今や白龍南に去。白きは源氏の服色也。南は則房総、々々は皇國の盡処也。われその尾を見て頭を見ず、僅に彼地を領せんのみ。汝は龍の股を見たり。是わが股肱の臣たるべし。さは思はずや」と正首に、和漢の書を引、古実を述べ、わがゆくす多の事さへに、思量りし俊才叡智に、氏元ふかく感佩し、「武弁の家に生れても、匹夫の勇に誇るは多く、兵書兵法に通するすら、今の時には稀なるに、なほつらわかきおん年にて、人も見ぬ書をいつのまに、読つくし給ひけん。さもなくておのづから、物に

博くは天の作る、君は意に良將なり。今こそまつせ結城にて、得死さりける氏元が、はじめの憾と  
つらうへなる、命めでたくけふにあふ、歡ひこれにますものなし。斯ゆくすゑの憑しきに、日は  
暮果て候とも、要なき入江に明さんや。安房へおん供つかまつらん、と思へども艫はなし。天は晴  
ても甲夜間に、月待わぶる途の便なさ、こゝろ頻りに焦燥のみ。せんすべなきは水行也、とは思は  
でや。後れたる、堀内貞行が今までも、まめらざること甚不審。富貴には他人も合ひ、まつしき  
時は妻子も離る。人の誠に經なければ、渠はや途より逃たりけんおほつかなく候」といひつゝ眉根  
うちよすれば、義美莞尔とうち笑みて、「さな疑ひそ木曾介。老黨若黨多かる中にて、彼と汝は人  
なみならぬ、志あればこそ、家尊大人擇せ給ひて、吾侪に属させ給ふならずや。われも亦貞行  
が人となりはよく知りつ。難に臨て主を棄、逃かくるゝものにあらず。今雲時こゝにて俟ん。月も  
出べき此なるに」と物に障らぬ言の葉も、心の底もいと廣き、海より出る十八日の、月おもしろき  
浦波や、金を集め玉を敷、龍宮城もかくやらんとて、主従額に手を翳し、思はずも木陰をはなれ  
て、波打際へ寄給ふ。

浩処に快船一艘、水崎のかたより漕出たり。「こなたへもや」と見る程に、はやきこと矢の如  
く、間ちかくなるまゝに、艫の中より声たかく、契あれば、卯の葉宣ける、濱屋にも、龍の宮媛  
かよひてしかな、と口実む一首の古歌仲止家業を、水主は何とも聞しらでや、そがまゝに漕着しかば  
件の人は、纜を、砂の中へ投かけて、その身も閃りと登り立を、と見れば堀内貞行也。「こは〜い  
かに」とこなたの主従、綾問兎に先に立て、舊の樹下に坐を占れば、貞行は松の下葉を、揺よせ  
て小膝を著、「向に相模路へ入りしより、渡海不便に候よしを、仄に聞て候へば、捷徑より先へ走  
て、是首彼首なる宿屋にて、津を求めども艫を出さず、ゆき〜て水崎に赴き、漁舟を借得たれ  
ども、餓させ給ふ事もやとて、飯を炊せ候程に、雷雨烈しくなりしかば、思はず彼処に日を消し、  
かくの如く遅参せり。はじめよりこれらのよしを、申上候はねば、いぶかしくおぼし召けん」とい  
ふを義美聞あへず、「さればこそいはざる事歎。われはさらなり木曾介も、こゝらに艫のありなし  
は、一切思ひかけざりき。もし蔵人なかりせば、今宵いかでか安房へわたさん。寔にこよなき才学  
なれ」と只管嘆賞し給へば、氏元は額を拊、「人の才の長き短き、かくまで差別あるもの歎。やよ  
蔵人ぬし、かゝる時には疑念も發りぬ。おのが心の淺瀬にまよへば、深き思慮ある和殿を狭して、  
今までわるくいひつる世」と咲つゝ告れば、貞行は、腹を抱てうち笑ふ。「現二鞞の隔なき、兵士  
の交は、かくこそあれ」と義美も、共に笑坪に入給ふ。

かくて又義美は、蔵人貞行にうち對ひ、「われは前面へ渡りかねて、こゝに汝を待ほどに、塊の

賜あり、又白龍の祥瑞あり。これらは船にて譚と、と自ら声を聞とりてや、水主は手を抗、さし  
招き、「月もよし。風もよし。とくく」船に乗給へ」と促す隨に主従三人、乗れば揺揚く棚なし  
小舟。水主は纜手繰よせて、取なほす棹のうたかたの、安房を望てぞ漕去ぬ。